桜さく島

見知らぬ世界

竹久夢二

路

青い野原のなかを、白い路がながく〱つゞいた。
母とも姉とも乳母とも、いまはおぼえもない。
おぶさつたその女が泣くので、私もさそはれてわけ
はしらずに、ほろ〱泣いてゐた。
女の肩に頬をよせると、キモノの花模様が涙のなか
に咲いたり蕾んだりした、白い花片が芝居の雪のやう

に青い空へちら〳〵と光つては消えしました。
黄楊のさし櫛がおちたのかと思つたら、それは三ケ月
だつた。
黒髪のかげの根付の珠は、空へとんでいつては青く光
つた。
また赤い簪のふさは、ゆら〳〵とゆれるたんびに
草原へおちては狐扇の花に化けた。
少年の不可思議な夢は、白い路をはてしもなく辿つた。

死

花道のうへにかざしたつくり桜の間から、涙ぐむだカンテラが数しれずかゞやいてゐた。はやしがすむのをきつかけに、あの世からひゞいてくるかとおもはれるやうなわびしい釣鐘の音がきこえる。
金の小鳥のやうないたいけな姫君は、百日鬘の山賊

がふりかざした刃(やいば)の下(した)に手(て)をあはせて、絶(た)えいる声(こえ)にこの世(よ)の暇乞(いとまごひ)をするのであつた。

「南(な)無(む)阿(あ)弥(み)陀(だ)仏(ぶつ)」

きらりと光(ひか)る金属(きんぞく)のもとに、黒髪(くろかみ)うつくしい襟足(えりあし)ががつくりとまへにうちのめつた。血汐(ちしほ)のしたゝる生首(なまくび)をひつさげた山賊(さんぞく)は、黒(くろ)い口(くち)をゆがめてから〳〵からと打笑(うちわら)つた。

あゝお姫様(ひいさま)は斬(き)られたのか。

それは少年(せうねん)のためには「死(し)の最初(さいしよ)の発見(はつけん)」であつた。

もう姫君(ひめぎみ)は死(し)んだのだ、死(し)んでしまへば、もうこの世(よ)で花(はな)も、鳥(とり)も、歌(うた)も、再(ふたゝ)びきくこともみることもでき

ないのだ。
涙は少年の胸をこみあげこみあげ頬をながれた。
「死顔」も「黒き笑も」泪にとけて、カンテラの光のなかへぎらぎらときえていつた、舞台も桟敷も金色の波のなかにたゞよふた。
その時、黒装束に覆面した怪物が澤村路之助丈えと染めぬいた幕の裏からあらはれいでゝ赤い毛布をたれて、姫君の死骸をば金泥の襖［#ルビの「ふすま」は底本では「うすま」］のうらへと掃いていつてしまつた。
死んだのではない、死んだのではない、あれは芝居というものだと母は泪をふいてくれた。

さうして少年のやぶれた心はつくのはれたけれど、舞台のうへで姫君のきられたといふことは忘れられない記憶であつた。また赤毛布の裡をば、死んだ姫君が歩いたのも、不可思議な発見であつた。

傀儡師（くわいらいし）

…………大阪（おほさか）をたちのいても、わたしが姿眼（すがため）に
たてば、借行輿（かりかご）に日（ひ）をおくり……………………
…
口三味線（くちさみせん）の浄瑠璃（じやうるり）が庭（には）の飛石（とびいし）づたひにちかづいてくる

のを、すぐ私どもはきヽつけました。五十三次の絵双六をなげだして、障子を細目にあけた姉の袂のしたからそつと外面をみました。

四十ばかりの漢でした、頭には浅黄のヅキンをかぶり、身には墨染のキモノをつけ、手も足もカウカケにつヽんでゐました、その眼は、遠い国の藍い海をおもはせるやうにかゞやいてゐました。棒のさきには、鎧をきたサムライや、赤い振袖をきたオイランがだらりと首も手をたれてゐました。

漢は自分のかたる浄瑠璃に、さも情がうつったやうな身振をして人形をつかつてゐました。

赤い襠をきた人形は、白い手拭のしたに黒い眸をみひらいて、遠くきた旅をおもひやるやうに顔をふりあげました。

……………奈良の旅籠や三輪の茶屋…………
　五日、三日夜をあかし…………

と指おりかぞえ

……………二十日あまりに四十両、つかひはたし
　て二歩のこる、金ゆへ大事の忠兵衛さ
　ん…………

といつて、傍らに首をたれた忠兵衛をみやつたガラスの眼には泪があるのかとおもはれました。

……科人にしたもわたしから、さぞにくかろう

お腹もたとう…………

思ひせまつて梅川は、袖をだいてよろ〳〵よろ、私の方へよろめいて、はつと踏みとまつて、手をあげた時、白い指がかちりと鳴つたのです。

私は泣きながら奥へはしりこみました。

阿波鳴門順礼歌（あはのなるとじゅんれいうた）

ふる里（さと）をはる〴〵

こゝに紀三井寺（きみいでら）

花（はな）の 都（みやこ） も近（ちか）くなるらん

「お鶴（つる）は死（しな）ないんですねえ、 母様（かあさま）」

「さいなあ、 阿波（あは）の鳴門（なると）をこえて 観音様（くわんのんさま） のお膝許（ひざもと）へ

いきやつたといのう」
「でも、お鶴はお祖母様の手紙を母様にみせたの」
「さいなあ、お鶴の母御は、その手紙をお鶴の懐からとりだして読みながらよみながらお泣やつたといのう」
「母様、お鶴は死んだの」
「なんの、死ぬものぞいの。お鶴は観音様のお膝許へいつたのやがな」
「母様、お鶴はなんて言つて歌つたの」

賽の河原で砂手本
一ツつんでは母のため

二ツつんでは父(ちゝ)のため
三千世界(さんぜんせかい)の親(おや)と子(こ)が
死出(しで)の旅路(たびぢ)をふだらくや
あすの夜(よ)たれか添乳(そへぢ)せん

「か……母様(かあさま)」

「なあに」

「お……お鶴(つる)は死(しな)ないんですねえ」

母

二人の少年が泊つた家は、隣村にも名だたる豪家であつた。門のわきには大きな柊の木が、青い空にそゝりたつてゐた。

私どもは柱や障子の骨の黒ずんだ隔座敷へとほされた。床には棕梠をかいた軸が掛つてゐたのをおぼえて

ゐる。
「健作の母でございます。学校ではもう常住健作がお世話様になりますとてね」
とお母様は言はれて、私の顔をしみ〴〵情ぶかい眸でみられた。
私は眼をふせて、まへにおかれた初霜の皿の模様へ視線をやってゐました。
「まあ」
と、思ひもかけぬ声におどろいて、私ははっと顔をあげたのです。
お母様は、はしたない行ひをおしつつむやうに

「草之助さんでござんしたか。ま、おほきくおなりやしたことわい、なんぼにおなりやんしたえ」

「十二です」

「まあそんなになりますかいなあ」と夢みる眸をあげて「ようまあ、よつてくださんした」

思ひいつてこういはれた言葉に、曾ておもひもしらぬ感激をおぼえて、私はしみ〴〵とよそのおばさんをみました。歯を黒くそめて眉の青い人で、その眼には泪があつた。

縁側で南天の実をみてゐたら、おばさんはうしろから私の肩を袖で抱いて

「おばあさんもおたつしやですかえ」
ときかれた。

千代紙や江戸絵をお土産にもらつて、明る日、村へかへつてきました。

祭の日が暮れて友達のうちへ泊つた一分始終を祖母に話してきかせました。すると、祖母は眼をみはつて、そのかたは父の最初の「つれあひ」だつたと驚かれました。

この日から、少年のちいさい胸には大きな黒い塊がおかれました。妬ましさににて嬉く、悲しさににて懐しい物思をおぼえそめたのです。蔵のまへのサボ

テンのかげにかくれては私とおなしに眼のわきに黒子のある、なつかしいその人のことを、人しれず思ひやるならはせとなつたのです。ですが私は、その人が私の「生みの母」であるといふことをたしかめるのを恐れました。やつぱりよそのおばさんです。私は、さう思つてゐねばなりませんでした。

窓のムスメ

中窓の欄干にもたれて雨だれをみてゐるムスメがあつた。

肩揚のある羽織には、椿の模様がついてゐた。髪はおたばこぼんにゆつてゐたやうに思はれる。

俯向いてゐたゆえ、顔はどんなであつたかそれはわか

らない。

けれど、五月雨（さみだれ）の頃（ころ）とて、淡青（ほのあを）い空気（くうき）にへだてられたその横顔（よこがほ）はほのかに思（おも）ひうかぶ。

戸外（とのも）にはカリンの木（き）がうはつて、淡紅（うすくれなゐ）の花（はな）の香（か）が暗（くら）い雨（あめ）の庭（には）にたちまよふてゐた。

それが何時（いつ）であつたとも、そのムスメが誰（たれ）であつたとも今（いま）は知（し）るよしもない。

母（はゝ）にきけど、そんな窓（まど）は見（み）たことがないといふ。

姉（あね）にきけど、そのやうなムスメは知（し）らぬといふ。

その頃（ころ）よんだリイダアなどの絵（ゑ）の女（むすめ）かとおもふけれど、それもたしかでない。

ムスメはつひに俯いたまゝ、いつまでも〱私の
記憶に青白い影をなげ、灰色の忘却のうへを銀の雨
が降りしきる。

炬燵（こたつ）のなか

……お庭（には）のまえの亀岡（かめをか）に
君（きみ）をはじめてみるときは
千代（ちよ）もへぬべき心地（ここち）して……

美迦野（みかの）さんは、炬燵布団（こたつぶとん）の綴糸（とぢいと）をまるい白（しろ）い指（ゆび）ではじ

きながら、離室（はなれ）の琴歌（ことうた）に声（こえ）をあはせた。

「あたしね、「黒髪（くろかみ）」をあげたらこんどは「春雨（はるさめ）」だわ。いゝわね。は　る　さ　め…………」

「……………………」

私（わたし）はだまつて美迦野（みかの）さんの靨（えくぼ）にうつとりとみとれてゐた。

「草之助（さうのすけ）さんてば返事（へんじ）がない、いゝ嫁（よめ）さんでもとつたのかい」

「…………」私（わたし）は笑（わら）つてゐた。

「なぜだまつてるのさ。なにかおこつたの」

「うゝん」

「さ、一がさした」

「二がさした」

「三がさした」

「四がさした」

「五がさした」

「六がさした」

「七がさした」

「蜂（はち）がさした、ぶん〱ぶん……」

「いや、美迦（みか）さんはあんまりひどくつねるんだものな

[#「な」は判読困難につき推定、コマ25-左-3]

「いたかつて、ごめんなさい」

そう言つて美迦野さんは、あまへたやうにしんなりとしなだれかゝつて
「まあおかあいそうに」
と言つて、赤くなつた私の手を熱い唇でひつたりと吸ひました。布団を眼深か［＃「眼深か」はママ］にかぶつた小鳩のやうに臆病な少年はおど〳〵しながらも、女のするがまゝにまかせてゐた。
少年は女の顔をみあげるのさえはづかしかつた。

底本：「桜さく島　見知らぬ世界」洛陽堂
　　１９１２（明治45）年４月24日発行
※近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）で公開されている当該書籍画像に基づいて、作業しました。
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字にあらためました。
※文中の「…」は底本では1文字あたり4点ないしは5点の点線ですが、文字の幅に合わせた「…」で代用しました。

※歴史的仮名遣いから外れたものも、底本通り入力しました。
※促音「っ」の小書きの混在は底本のままとしました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：土屋隆
校正：田中敬三
２００５年８月22日作成
２０１０年11月１日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。